

		令和3年度 西東京市立ひばりが丘中学校 学校評価			5：達成率90%以上 2：達成率40%以上	4：達成率80%以上 1：達成率40%未満	3：達成率60%以上
学校教育目標		広く国際社会を創造性豊かに、たくましく生きる人をめざして ・自ら学ぶ ・豊かな心 ・夢の実現					
目指す学校像	【目指す学校像】	「地域、保護者の期待に応える学校」●生徒の力を伸ばし、一人一人が主役となる学校●生徒、保護者、地域から信頼を寄せられる学校●組織力が高く、柔軟な対応力や確実な実行力のある学校●新校舎移転と60周年行事に向け、60年の伝統を引き継ぎ、新たな学校の発展の期待に応える学校					
	【目指す生徒像】	「知・徳・体のバランスがとれた生徒」●社会自立に向け、自らを高めていく生徒 ●授業を大切にし、自ら考え学ぶ生徒 ●豊かな心に根ざして、夢の実現を目指して未来を切り拓く生徒 ●健康と体力増進の自ら努める生徒					
	【目指す教師像】	「高い人権意識と実践的指導力をもつ教師」●人権意識を高くもち、『西東京あったか先生』を実践し体罰その他の服務事故ゼロに全力で取り組む教師●学習指導力、生活指導・進路指導力、組織貢献力、外部との県警折衝力をバランスよく高め学び続ける教師●率先垂範し、ともに互いに高めあう教師●働き方改革を実践し豊かな生き方を示すことができる教師					
本校の実態と課題		○昨年度は「考え議論する道徳授業の構築」と、西東京授業スタンダードによる主体的・対話的で深い学びとなる授業づくりを実践してきた。その結果、生徒は授業におけるねらいを把握し、主体的に取り組む学習活動を通して互いに高め合い、振り返りの中で新たな課題を発見するといった基本的な学習過程を身に付けている。また、生徒会、各種委員会等の取組を意図的・計画的に行うことで、自分からあいさつができる生徒に成長し、自己肯定感が向上した生徒も増加している。今年度は、新学習指導要領の実施に伴い課題解決型授業の展開、GIGAスクール構想によるICTの効果的な導入が課題となる。					
	具体的方策	取組指標 (教員)	成果指標 (生徒)	成果指標 (保護者)	学校の取組及び改善策		学校関係者評価記入欄
確かな学力の向上	めあてをつかむ・主体的に取り組む・高め合う・振り返るという「西東京市授業スタンダード」で学習活動を展開する。	5	5	4	・年間を通じて「西東京スタンダード」を基本として授業を展開してきた。その中で、全教員が研究テーマについての視点A：タブレットを活用した授業 B：第3観点を評価する授業 C：課題解決型の授業 を選択し、研究授業を行った。また、研究授業には空き時間の教員が参加し、評価と改善点を共有することにより、授業の質を高めることができた。来年度は、「導入時に学習意欲を高める工夫する」「探究的な活動により課題の解決を図る力を育成する」「振り返りの中で身に付いた力を把握させ、新たな課題を発見させる」という授業を全教科で実施し主体的・対話的で深い学びを実現していく。		90%を超える生徒が各教科で前向きに取り組んでいると回答しており、95%の生徒が「わかりやすい授業の工夫」を感じ取っているのは、とても評価できる。オンライン授業では、板書の工夫や机間指導が難しいと思われる。今後は、教科毎のタブレット使用率、活用状況がわかるような評価項目を設定するとよい。
	授業で記録する・要約する・説明する・論述する場面をより多く設定し、自分の考えをまとめる活動や話し合い活動などを通して、主体的に学ぶ機会をもつことができている。	5	5	3	「記録する・要約する・説明する・論述する」という言語活動をより多く設定し、生徒の主体的な活動を多く取り入れてきた結果、90%以上の生徒が肯定的な意見をもつことができている。来年度は、国語科で身に付けた話し合いのスキルを全教科で共有し、探究的な活動により課題の解決を図る力を育成する必要がある。		話し合いスキルを身に付け、教科を越えて共有していくのは評価できる。しかし、スキルに傾倒することなく、思考の過程も大切にしている必要がある。話し合い活動や発表では、個々の生徒の性格による差もでてくる。苦手な生徒も認められる声かけをしていくことも大切である。
	教材教具の工夫やICT機器の活用を進め、授業での教材の提示、調べ学習、思考過程の可視化、発表や発信、及び家庭学習を充実させる。	5	5	3	GIGAスクール構想の実現により、一人一台のタブレットが配置され教員間で情報や教材を共有しながら工夫を重ねてきた。導入当初より先進的な教員が検証授業を行い、ICTの牽引役となってきたが、オンライン授業の実施により、全教員が技術の向上を図ることができた。来年度も、ただタブレットを使うのではなく、どうすればICTを利用して授業をアップデートできるか、生徒に力を付けさせるためには何をICT化するべきであるのかを探求し、授業に反映させていきたい。		デジタル教科書が効果的に使用されている様子がよくわかった。また、オンライン授業によりタブレットの技術は向上している。ただ、一方でオンラインやタブレット使用でストレスが高まる生徒がいることにも留意すべきである。
豊かな心の育成	道徳授業の充実により、自己を大切にし、他者を尊重し合う豊かな心を育てる。	5	5	3	昨年度に研修の主課題として「読む道徳から考え議論する道徳へ」とテーマを設定し、職員研修において学年毎に指導案検討、模擬授業を重ねた結果、教員側の意識の向上が顕著に見られるようになった。それに伴い、授業内容も改善され、一方通行の道徳ではなく、活発な意見交換が見られるようになってきている。その結果、生徒たちは他人を尊重し、思いやる心を育むことができている。今後は、単なる意見交換ではなく「議論」における論理性や根拠の妥当性にも焦点を当てていく。		「思いやりの心を持つことができた」と答えた生徒が94%いることから、多様性の理解や豊かな心を育むために、これからもより一層道徳教育を充実させていってほしい。
	学校行事や生徒会活動、部活動などの諸活動を通して、学級・学年への所属感や自己有用感を育てる。	5	5	4	今年度も新型コロナウイルス感染症予防のため、学校行事が大きく削減・変更されることになった。その中でも、生徒たちは「できないことを嘆くのではなく、できる範囲で最大限のことをやろう」とする意識を身に付けることができた。来年度以降も予断を許さない状況ではあるが、これまでとは異なる限られた環境の下で、最大限の効果を得られる教育活動を模索していく必要を感じている。		学校行事が減っている中でも、生徒は前向きに生活を送っている一方で、ストレスをため込んでいる生徒もいる。不登校への対応など、今からアフターコロナを見越して、タブレットの活用も含め新たな教育活動を模索していく必要がある。
	いじめられたり、無視されたりすることなく安心して学校生活を送れるように、教員間で生徒情報の共有を積極的にに行い、いじめ防止に努める。	5	5	3	毎週の生活指導委員会では、生徒の情報共有を密に行うとともに、スタートアップの担任との二者面談、毎月の生活指導アンケート、ひばり月間の取組など、生徒に寄り添う取組を大切にしてきた。その結果、99%の生徒が「学校でいじめられたり、無視されたりすることなく安心して活動できる」と感じている。今後も、事が起こったときには安易に解決を図ろうとせず、「背後にいじめがあるのではないか」という考えをもちながら、生徒と保護者と接していく。		99%の生徒が安心して学校生活を送っていることは評価できる。先生方が生徒一人一人の良さを認めていることが好評につながっている。ただ、100%ではないことも忘れてはならない。
	挨拶や言葉遣い等のルールやマナーの大切さを伝え、規範意識を高めるとともに、よりよい生活習慣を身につける	5	5	4	生徒自身が良いことと悪いことの分別をつけられるよう、全教員が共有して指導を重ねてきた。その上で生徒が自分たちで考え、正しい規範意識を育てる工夫を行った。その結果、96%以上の生徒が自分自身で「時間・挨拶・言葉遣いなど、集団のルールやマナーに気を付けて学校生活を送れている」と実感しており、今後もこの流れを大切にしていきたいと考えている。		一人一人がひばりが丘中学校の生徒であることに誇りをもっていることがうかがえる。自らを振り返ったときに、きちんと学校生活を送れていることを胸を張って言えるのはすばらしい。今後もこの雰囲気を大切にしていってほしい。
夢の実現	三年間を見通した進路指導計画により、生徒が自分及び自分の生き方に自信をもって進路を切り開いていけるように指導・支援する。	5	4	3	今年度も職場体験が中止となる中、おやじ倶楽部の方による各学年において講演会が実施された（1年2年：職業講話、3年：卒業前の進路講話）。保護者や教師以外の大人の方からの講話は生徒の心に響き、「夢の実現」に向けた取組となり、保護者からも高い評価をいただいている。また、進路指導については、3年間を見通したキャリア教育の実現のために、学校として統一したものを確立させることに取り組んでいる。		おやじ倶楽部の職業講話は、長年培ってきたひばりが丘中学校の財産である。職場体験など、外に出て行く活動が制限される中、職業観を育成する本取組は、これからも継続していってほしい。
地域との連携	学校HP・学校便り・学年便りなどを通して、学校の教育内容や生徒の活動について積極的に発信し、理解と協力を得る。	5	5	4	新型コロナウイルス感染症予防のため、学校を公開する機会をほとんどもてなかった。そのため、ホームページを毎日更新することや、学校便り・学年便りの発信によって、教育内容や指導の方針を伝えてきた。そのことが学校の信頼を得ることにつながり、各方面から高い評価を得ることになった。今後は移転に伴う新たな地域との関係作りに尽力をしていく。		日々のホームページ更新など努力はしているが、保護者に届くような方法検討が必要である。学校の取組を発信し、届けていくには地域の方も大切になってくる。
	部活動支援員や、学習支援員、SSSなど、外部の人材を活かしたり、経営支援部を充実させたりして、よりよい教育活動を展開するために、組織的に働き方改革に積極的に取り組んでいる。	4	4	3	SSS（スクールサポートスタッフ）については、業務の割り振りがスムーズに行えるようになっており、印刷や授業の準備の手助けなど、教員の働き方改革につながっている。また、外部人材も含めて「チームひばり」として一体感をもって教育活動を行うことができている。今後は、来年度からはじまるコミュニティスクールに向けて、コーディネーターに対して学校のニーズを明確に伝え、地域人材とのつながりを、より密にしていきたいと考えている。		SSSの活用とともに、教員の意識改革により、勤務時間は減ってきている。来年度はコミュニティースクールが発足し、地域人材の活用も期待できる。そのように生み出した時間を子どもたちと向き合う時間として、有効に利用していくことが、より一層求められる。